

# 富山如大地

—第130号—

発行人

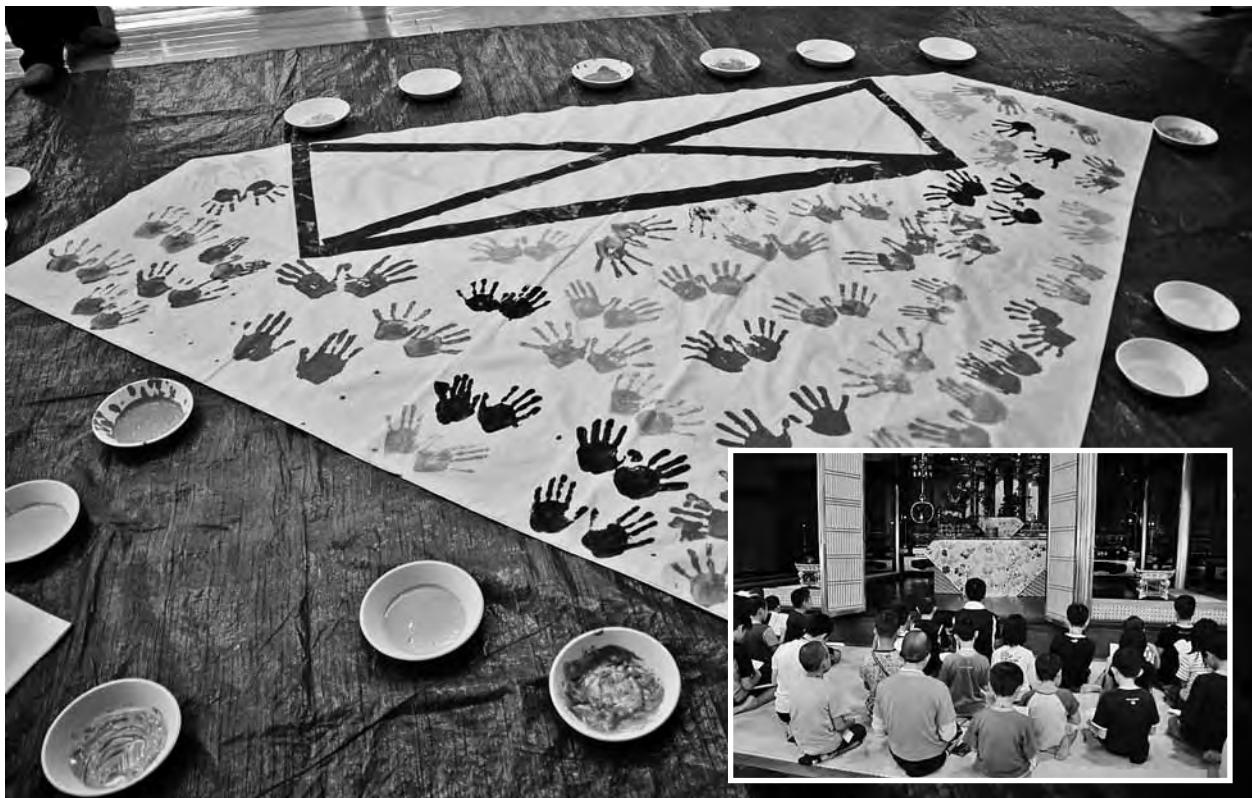
辻森 正顯

発行所

富山市総曲輪2丁目8-29 真宗大谷派富山教務所

編集

富山教区如大地編集委員会



## ～第51回児童研修大会～

2011年8月24日から26日まで開催

千田法衣店（富山市越前町）より寄贈いただいた真っ白の打敷。その打敷は、次々に押される参加児童の手形や、「いのち」をテーマにしたイラストにより彩られた。

被災された皆様方の心情を察し、心を痛めながらも全国津々浦々から五十数万人の門信徒の方々が上山されたことは、心の底から宗祖への想いがあるからではなかろうかと実感いたしました。

一生に一度遇えるか否か、昨年は宗祖親鸞聖人の七百五十回御遠忌法要の年であります。一方、東日本では、数百年に一度の大震災、これも歴史のめぐり合わせかと考えさせられました。

近代的な時代。宗教離れが叫ばれる今日。これだけ多くの参拝者が馳せ参じたことは、宗祖親鸞聖人への信仰心が薄れてはいる証ではなかろうかと感じ取れました。

心を一にしてといいますが、被災地域の復興を念じつつ、同じ想いを抱いた方が御遠忌会場に一堂に会し参拝されたことは、「共に想い会う」ではなかろうかと実感いたしました。

私達、片田舎の農村地帯では、理屈抜きで共に生きる・共に救われるという想いがあるからこそ、お参りするのですとの声を耳にしたことがあります。『共生』ということについて考えてみたいと思います。

## 宗祖親鸞聖人 七百五十回御遠忌への思い

人生講座 二〇一年六月十六日

# 宗祖親鸞聖人に遇う——法難

溪内弘恵氏

です。親鸞聖人は『御消息』で、  
仏法をばやぶるひとなし、仏法者のやぶるにたとえたるには、「獅子の身の中の虫の獅子をくらうがごとし」とそらえ、念佛者をば仏法者のやぶりさまたげそらうなり。よくよくこころえたまうべし。

（親鸞聖人『御消息集』一〇 聖典 五七四頁）

承元の法難  
ご紹介いただきました渓内です。  
「宗祖親鸞聖人に遇う——法難」というテーマをいただいております。

今の時代と親鸞聖人の時代と照らしながら考えてみたいと思います。

具体的に取りあげられますのが「承元の法難」です。これは、法然上人が『選択本願念佛集』を著して、「ただ念佛」の教えを説き、人々がその教えに感動して、京都吉水の地に念佛者の集まりができ、巷に念佛する者が溢れ、それまでの鎮護国家の仏教が批判され、比叡山や奈良興福寺などに危機意識が生まれたということです。

そこで、引き起こされたのが、「承元の法難」と言われる念佛者への弾圧で、これは正に、仏教者が念佛者を弾圧した歴史的事実なのです。この南都・北嶺による吉水教団への弾圧に対して朝廷は、朝廷内部にも念佛者がいたため静観の態度を取っていたのです。その中にもいろいろな

動きがあるのですが、興福寺にしても比叡山にしても単独の訴えであり、必ずしもこの両者が一致しての訴えではなかつたため、朝廷でも協議され問題にはなつたのですが、うやむやのうちに終わつてしまつていたのです。

しかし、後鳥羽上皇が熊野神社参詣の留守中に、後鳥羽上皇が寵愛していた、「松虫」と「鈴虫」という側近の女性が、御所から抜け出して「鹿谷草庵」で行われていた念佛法会に参加し、安樂坊の『六時礼讚』の美声に魅了され出家を懇願したといふのです。しかし、安樂房と住蓮房は、上皇の許可がないことを懸念し躊躇したのですが、二人の真摯さに動かされて剃髪の儀を行ひ出家させてしまったのです。それだけではなく、『愚管抄』という書物によれば、彼女たちは安樂房の説法を聞くために彼らを上皇不在の御所に招き入れ、夜遅くなつたのでそのまま御所に泊めたとされているのです。

そのことを知つた後鳥羽上皇は憤怒し逆上して、承元の法難と呼ばれる弾圧に対する抗議をしたのです。その中にもいろいろな

庄が、承元二（一二〇七）年二月、専修念佛停止の院宣が下され、住蓮房・安樂房に死罪を言い渡し、住蓮房は六条河原において斬首、安樂房は近江国馬淵で斬首されています。このほか、西意善綽房・性願房の二人も死罪に処されました。法然上人は土佐へ、親鸞聖人は越後に流されます。今から八百年ほど前のことです。

住蓮坊がその時に、「念佛者を謗つたり迫害したりすることは、地獄に堕ちて苦しむことになる。だから、そういうことは止めてどうか如来の御心である平等心を生きる念佛者になって下さい」と、後鳥羽上皇に念佛相続をしたと伝えられているのです。

この事件の背後には、奈良興福寺衆徒の『興福寺奏状』や北嶺比叡山の『比叡山奏状』の激しい突き上げがあつたのです。仏法者が念佛者を誹謗しているのです。承元の法難というのは、権力を振るつて直接弾圧を下したのは、なぜかと云ふと、これは政治と関わる問題だからでしょう。親鸞聖人は、政治と対立せよとは言つていませんけれども、政治との関係を無視すれば、仏法は骨抜きになるでしょう。今日、原発が爆発して、政治は何をしている

のかというと、そっぽ向いて権力争いをやっているわけです。親鸞聖人の當時、政宗と宗教がそうなのです。宗教が当時の仏教を代表する教団です。

興福寺の仏教は学問仏教ですから、民衆とは直接関わりを持つことはありません。今日でもそうでしょう。おおざっぱな言い方ですが、仏教といえば、浄土真宗と聖道門仏教の二つの流れで、日常生活の中で触れ合う仏教というと、念佛しかないと思います。親鸞聖人当時は、仏教は学問と行の仏教です。学問もしないし、修行もしないものは仏教にならないし、教えの救済にもあずからない、助からないといふことになっていたのです。だから、「学問もいらない、修行もいらない、ただ念佛一つ」と言われた法然上人の教えは、当時の仏教界から非難されることになったのです。今日でも、そういう考え方があります。

## 國家権力と宗教

江戸時代以降、檀家制度が江戸幕府によって政策的に行われ、教団仏教になり、真宗教団では「善知識だのみ」になり、教えを説くことも、また聞くことも、いらないことになってしまったのです。そういう意味で、蓮如上人の後、浄土真宗は変質し、「なんまんぶつ」の教えが曲がっていきました。

自分が邪見だとは思いませんね。自分が一番かわいい、それが正しいと思ふ。」「有情の邪見」と言われていますが、こんでいることを邪見と言うのです。う。「熾盛」は、さかに燃え盛ることです。俺の言うことがなぜおかしい

江戸時代の真宗教団は、教えがないのです。門徒の一生は、本願寺の法主の手の中にあったのです。そして、生きては法主の命に従い、死んだら淨土と、それが当時の仏教を代表する教団です。

のです。

それはどうしてかと言えば、政治との関わり方の問題でしょう。また、教団仏教の在り方の問題でしょう。江戸幕府の政策によって、キリストン禁制政策の一翼を担い、権力翼賛のはたらきをしてきたのが江戸時代の真宗教団です。決して、この世の問題をこの世で解決をさせないで、死後の問題として処理をしていたのです。親鸞聖人の即得往生の教えが、みな未来往生にすり替わってしまって、現実に目をつぶることになったのです。

法難ということですぐに憶い起こされたのは、次の和讃です。

有情の邪見熾盛にて  
叢林棘刺のごとくなり  
念佛の信者を疑誘して  
破壊瞋毒さかりなり

(真宗聖典 五〇一頁)

## 誹謗正法

本願の教えは、国造りの教えです。共に与えられているいのちを生きる者の國を、それこそ「いのちの國」として回復し、「いのちの法則」である本願をこそ國の基本として、どのようなものも「えらばず、きらわず、みすてず」、すべてを迎える國が、願いう形で展開されているのです。そういう国こそ「眞実の國」ということがで

のか、俺が俺がという、そういう思いが集団になって國を作っているのではないでしょうか。

本願を因として國を建てたということはないのでしょうか。以前、加賀の真宗門徒は百年の間、「百姓の持てる國」と言われ、念佛を宗として國を建て、本願に因る統治を行ったといわれています。しかし今日では、歴史を学ぶ者以外にほとんど知られないことです。

國を建てるということは、貪欲を離れて一人一人の尊厳を守っていく、そういうことが基本でなくてはならないと思うのです。今日でも我々の意識は、國のためなら一人一人の「小の虫」は殺してもいいのだという考えがどこかにあります。

本願の教えは、國造りの教えです。共に与えられているいのちを生きる者の國を、それこそ「いのちの國」として回復し、「いのちの法則」である本願をこそ國の基本として、どのような念佛一つとは、学問も修行もいらぬ念佛正法です。親鸞聖人の時代、念佛者達は、同じ仏教者から非難を受けたのです。法然上人が「念佛一つでいい」と言われたその教えを聞いて、人々は広い世界に出ることができたのです。

念佛一つとは、学問も修行もいらぬ、ということなのです。「一切衆生平等往生」というのが本願念佛の教え。どのようないのちも、みな平等ないのちとしてここに与えられ、共に一つなりの命を生きているというその事実に、親鸞聖人当時の人々は目覚めたのです。

しかし、親鸞聖人の時代は、まさに権力社会であり、その権力を補完し維持するための道具として仏教を利用す

るわけですから、初めから南都、北嶺の仏教は民衆と関わりを持つはずのないものなのです。そういうことの中では、本願念佛の教えのもとで如来の大慈悲心に触れて、当時の民衆がみな等しい尊いいのちだということに目を覚まし、それを主張したときには、南都、北嶺は国家権力を利用して弾圧したのです。権力者である後鳥羽上皇を動かし、安樂坊たちの首を切りおとし、法然、親鸞を流罪に処したわけです。

「法」と「則」

「さとり」について、お釈迦様は、「苦行はさとりには無意味である」とはっきり申されたのです。苦行によつてさとりは開かれるものではないということです。苦行は肉体を衰えさせ、氣力を失わせていくだけであつて、決してさとりにはならないと言われます。ですから、苦行は必要がないと言われているのです。「さとり」は「さとりの法」がはたらいて我々の「さとり」になるとということです。「法」がはたらいて、我々の「則（のり）」になる。それを「如来よりたまわりたる信心」と言われているのです。その信心が私たちの生活の「法則」になるのです。「法」は「聞く」ことによつて私たちの「則」になるのです。法という手に取つて見えないけれど、教えを聞くことを通して、いつでも、どこでも、

いうことは、そういう如来のお心を一切衆生に知らしめて、信心としてのさとりを与えるようというのです。本願力が働いて私達を、一切衆生平等往生と目覚めさせるのです。何十年も仏道修行しているという自負のある者は、念佛一つで助かるなどということは、金輪際認めるわけにはいかないのです。そのようなものでさとりが開かれるはずがないのだということになるのです。よう。

南無阿弥陀仏と念佛申すということは、如来さまのさとりの世界をいただくことなのです。如来さまのさとりをそのままにいただくのですから、私が如来さまのさとりを開く必要はないのです。すでにさとりの世界が、親鸞聖人の教えとなつて私たちに来て下さっているのです。それをまっすぐいた

貴族社会の中の身分意識であり、貴人意識ではないでしょうか。問題があります。そういうこととは関係なく、多くの人々は親鸞聖人の教えに出遇つているわけです。

例えば中村久子さんは、あなたの宗教は何ですかと聞かれると、「私は親鸞聖人が大好きなんです。親鸞聖人のお念仏の教えが、私の宗教です」とおっしゃっています。本願寺とは言わないのです。本願寺や貴族社会を超えているのが本願念仏の世界です。浄土のさとりが開け、その中で生きられたのが親鸞聖人です。そういう浄土の世界が開けていたからこそ、お寺は残っているのでしょうか。

今回の地震によって、私たち自身が与えられる生かされている身の事実に立つ

苦しむ人びとに出会われて、その人たちを何とか助けたいという思いが起っこして、それを止められた。この消息は何を物語っているのでしょうか。つまり、「念佛のほか何の不足あってか」というお言葉は何を意味するでしょうか。

どのような環境にあろうとも、その人たちとどう関係できるのか、そういうことが、念佛一つ、ということに集約されているのでしょう。つまり、念佛一つということは、いつでも、どこでも、誰にでも、選ばず、嫌わず、見捨てずの如来の御心をもって接するということに他ならないのです。この法難ということからも、またそういうことが促されていると思うのです。

誰にでも同じようにはたらいでいることが知られるわけです。  
さとりには、さとれる法則があるのです。法則がはたらいて、いつも私達に、本当の自分に目覚めよと促しているのです。私たちの思いを破って、身の事実を知らせ、それに順うことを求めてくる。それがいのちの真実と知つて、それに順つたから、如来様と言わされたのでしょう。そういうことを私は分かっていないのです。

親鸞聖人

覺如上人か、『御伝鈔』を書いて親鸞様を本願寺の聖人にして、雲の上の人に祀り上げましたが、藤原氏の祖先である天児屋根尊（あまっこやねのみこと）というのは、天照大神が降臨してくるときに道案内をしたという伝説の存在です。親鸞聖人はその末裔で

た、生命觀、世界觀、そしてその歴史観の獲得を促されていると思うのです。津波で流されてしまって生きられないということでしょうか。地震という自然現象に思い知られたことは、私は今は本当に自然界の中にある自然物だということです。今は、私達がその自然界に目を覚まし、そこに大いなるいのちの世界と時があることを知らねばならない時なのでしょう。それこそ、「どこから来て、どこへ行くのか」そういうことが問われているのでしよう。

親鸞聖人は、越後から関東に向かわされたとき、佐賀という土地で大飢饉で

ければいいのです。  
一切衆生平等往生ということをそのままいただくことが、私たちの救いなのです。

覺如上人が、『御伝鈔』を書いて親鸞様を本願寺の聖人にして、雲の上の人に祀り上げましたが、藤原氏の祖先である天児屋根尊（あまっこやねのみこと）というものは、天照大神が降臨してくるときに道先案内をしたという伝説の存在です。親鸞聖人はその末裔で、あると覺如上人はいうのです。それは、貴族社会の中の身分意識であり、貴人意識ではないでしょうか。問題があります。そういうこととは関係なく、多くの人々は親鸞聖人の教えに出遇っているわけです。

例えば中村久子さんは、あなたの宗教は何ですかと聞かれると、「私は親鸞聖人が大好きなんです。親鸞聖人のお念仏の教えが、私の宗教です」とおっしゃっています。本願寺とは言わないのです。本願寺や貴族社会を超えているのが本願念仏の世界です。浄土のさとりが開け、その中で生きられたのが親鸞聖人です。そういう浄土の世界が開けていたからこそ、お寺は残っているのでしょう。

今回の地震によって、私たち自身が与えられ生かされている身の事実に立ま

た、生命觀、世界觀、そしてその歴史観の獲得を促されていると思うのです。津波で流されてしまつて生きられないという事でしょうか。地震という自然現象に思い知られたことは、私たちは今本当に自然界の中にある自然物だということです。今は、私達がその自然界に目を覚まし、そこに大いなるいのちの世界と時があることを知らねばならない時なのでしょう。それこそ、「どこから来て、どこへ行くのか」そういうことが問われているのでしょう。

親鸞聖人は、越後から関東に向かわされたとき、佐貫という土地で大飢饉で苦しむ人びとに出会われて、その人たちを何とか助けたいという思いが起こり、三部経千部読誦ということを始めようと思われたけれども、念佛を憶い起こして、それを止められた。この消息は何を物語つてるのでしようか。つまり、「念佛のほか何の不足あってか」というお言葉は何を意味するでしょうか。

どのような環境にあろうとも、その人たちとどう関係できるのか、そういうことが、念佛一つ、ということに集約されているのでしょう。つまり、念佛一つということは、いつでも、どこでも、誰にでも、選ばず、嫌わず、見捨てずの如来の御心をもって接するということに他ならないのでしょう。この法難ということからも、またそういうことが促されていると思うのです。

## 末法

仏法を誇り、生活の中心に法がない時代を末法と申します。私たちも、末法末法と言うのですけれども、一体末法の事実はどこにあるかと言いますと、仏法を仏法としないもののところに末法ということがあるのです。ですから、自分は門徒で家にお内仏があつても、忙しいから参らないというのは、仏法を蹴飛ばしていくことになるのではな

いでしょうか。

以前は、真宗門徒の生活はきちっとしていたのです。いただき物があつたら必ず御本尊の前に置いて、「これは如来様からのいただき物だ」と併んでいただいてきたのです。今は人から貰いものがあれば、「ああ、御馳走さま」といつてすぐに食べてしまます。街の食堂へ行つても、手を合わせて「いただきます」と言うような人は少なくないで、誰もが自分で生きることを是としているのです。私達の生活に仏法が消えてなくなっていて、誰もが自己中心に生きることを是としているのです。そういうことで、あらゆることが濁つてくると、仏の教えは教えているのです。

親鸞聖人自身は、『教行信証』信巻で、仏弟子を名告る自分を次のように告白しておられます。

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞愛欲の広海に沈没し、名利の大山に

迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまさることを、恥すべし、傷むべし、と。

(聖典 二五一頁)

こういう親鸞聖人の告白に、私たちも自分自身のこととして聞き通すべきことではないでしょうか。

## えらばれず へだてなし

親鸞聖人の時代、貴族以外は人間とは認められていなかつたのです。貴族社会が絶対化されている時代です。後鳥羽上皇という権力者がいて、それを頂点としてすべてが支配されていた時代です。支配する者と支配される者です。そこには等しい人間関係というものが成り立たないので。今日でも、

社会問題といわれる事柄は同じような問題です。平等な関係が開かれていかないのです。平等な観察が開かれていかないのです。

そういう意味で、その社会は人間が一人もいないと言つていいのでしよう。これは、「鬼神」と言われるものでしょ。本来、権力というのは、公なものです。個人的、恣意的に運用される人々ははなはだ迷惑するものです。権力というものはむしろ、そういう個人的、恣意的なものを抑止するためにはめられている公な力でしよう。権力の頂点が恣意的、個人的にはたらけば、

気に食わないからと、その者を引き出しても首を切るということも起つてくる。このようなことは人間の仕業ではないでしよう。

そういう在り方を、仏の教えでは、「鬼神」と言うのです。親鸞聖人はこの「鬼」という字を、『教行信証』化身土巻に引用しておられて、「鬼は病悪を起こす、命根を奪う」としておられるのです。生きている者を屍にしてしまうということです。現代の鬼神は

「金」と「力」でしよう。私たちは、そういう金とさまざまな能力を頼りにして、いかに優位に生きるか、ということをいつも気にしているのです。そういうことが、「鬼神に仕える」ということではないでしようか。親鸞聖人は、「人は鬼神などに仕える必要はない」と、そういう在り方を厳しく批判されています。

本願念佛の教えに出遇い、人間を回復し、念佛申して生きていった人たちが、どんないのちも尊いのだと言つて、いきいきと生きはじめたすがたに、比叡山や興福寺は危機感を持ったのでしよう。南都北嶺の佛教は、鎮護国家のためのものです。それは、仏教を利用して民衆を支配するための道具にもなっているのですから、民衆が平等のいのちに目覚めて、その平等の世界を生き始めたことによって、権力社会は搖らぎ危機に瀕することになります。力や宗教で脅して取り上げて生活している人たちですから、そういう危機感は当然のことでしょう。浄土真宗の教団もやがて江戸時代になると、そのようになつてきます。この問題は、今まで引きずつていて、教団の足枷になつてゐるのです。

この私たちの国には、人間がいないと言われているのです。この国の教育問題や政治問題、そして生活文化をよく見て行くと、平等観というものが見失われているのでないでしようか。たとえば親子関係を見ますと、親は子を自由にしてもいいという意識があつて、親が子を躰（しつけ）とか教育と称していじめてしまふ。子が親にいじめられ、そういう子どもたちが学校に行つていじめられたり、いじめたりするのです。みんな大たちの生活態度に見習つてゐるのです。単純明快です。自分の

思いを中心として、経済中心の現代社会にあつては、あらゆる存在が人間の欲望の対象にされて、みな物にされてしまう。すべてが商品であり、間に合うか間に合わないか、損か得か、善いか悪いかと、つねに選び取り、選び捨て、差別され排除されていく。仮によしとされても、それは間に合うあいだのことであつて、存在の尊さや尊厳は問題にされないから、その生活現場は地獄化しているわけです。

生き方に親鸞聖人は感動されているのです。それが、『源空和讃』の一首に示されています。浄土真宗といいましても、こういうことなのです。それは、

源空光明はなたしめ

門徒につねにみせしめき

賢哲愚夫もえらばれず

豪貴鄙賤もへだてなし

(真宗聖典 四九九頁)

光明は、明るい平等関係の世界のことです。「婆さんはいらんぞ」とか「銭儲けせん奴は、おらんでもいい」とか「能力の低い奴はいらんぞ」「点数の悪いものは学校でいじめられて当たり前だ」というのは、暗い世界です。「年取つたらつまらん」と考えるのは暗い世界です。この『和讃』は、親鸞聖人が法然上人との出遇いを決定的なものとして受け止めることができた証でしょう。親鸞聖人が出遇った法然上人の世界が、この和讃で詠われているのです。まさに、念佛者の証が目の当たりだったのです。

「えらばず、へだてなし」、本願念佛の世界をこういう言葉で表現されています。年寄りはいらない、病人もいらない、貧乏人はいらない、能力の低い者はいらない、女はいらない、子どもはいらない、というようなことを言ふのは差別による排除であり、これこそ悪鬼神と表現される在り方でしょ。

人を殺していく言葉ですし、人が死んでいく言葉です。人は言葉によって殺され死んでも生きもし、言葉によって殺され死んでも生きます。そういう意味で、「いかなる教えに出遇うか」という問題で、教えによって私たちの生き方が決まっていくのです。それで、「眞実の教え」ということが問題になるのです。

## 生活と仏法

「念佛申す」というのは、「一切衆生平等往生」、「いのち尊し」ということを、いつも確認している世界です。

法然上人の「ただ念佛」との教えに出遇われた親鸞聖人や多くの人々は、それまでの暗い世界が一変し、生き生きとして生き始め、巷に念佛往生の教えが伝わり、念佛の声が日増しに京都の街や周辺に高まるにつれて、比叡山や興福寺への批判が強くなっていく。そういう中にあって、「仏法は我にあり」としていた比叡山や興福寺に危機感が生まれてきたことは容易に想像できることです。

そして、そういう危機感が『興福寺奏状』や『比叡山奏状』につながっていったのでしょう。その結果弾圧が行われた。その比叡山や興福寺は国家の庇護を受けているわけですから、それを庇護している権力の側が、「法然門下は仏教ではない」と言つたことになります。そして、人々に生きる力を、

生きる世界を、いのちの世界を明らかにした法然上人や親鸞聖人、住蓮房や安樂房を徹底的に弾圧したわけです。そのようにしむけたのは、他ならぬ仏教者たちです。

「そうであつたか申し訳ない、我々は知らなかつた、間違えていた」ということは未だないのです。八百年前から今まで、國家権力による、いや南都・北嶺による「念佛者への弾圧が仏教者として間違いであった」というような言葉は、今日でも当事者である南都・北嶺から一言もないのです。

そして、念佛申してきた私たち自身の背景には、この法難問題をなおざりにして、むしろそれを覆い隠すような歴史があります。特に、江戸時代以後の真宗教団は幕藩体制と結び、大衆を支配し弾圧することに加担してきたという歴史的事実があります。これは、仏法に背くことであり、「誹謗正法」の問題なのです。その問題は今日まで清算されておりません。

「法難」ということは、私達の生活を一生涯照らしていくような、そういう意味をもつた言葉になつてゐるのであります。つまり仏法を生活の中心とし、大事なものとしないで、生活のアキセサリーのようにしててきた私たちを照らし出す言葉です。「私」を中心にして眞実の教えを持たない生活は、流転を免れません。私たちの生活の問題点は、存在の事実が受け止められないで、い

きなりそれぞれの思いから始まることがあります。逆立ちしてしまつてゐるのです。「生きるのに宗教などいらない」というようなことは、日本の社会ではそこらじゅうで言われています。また、「宗教は個人のものであつて、政治に宗教は必要ない」と言う。そうではないのです。政治にこそ、眞実の宗教が必要です。けれども、宗教団体や宗教組織が政治と関わつたら危ないという

真実なる宗教、「一切衆生平等往生」という宗教が必要です。平等というのは無条件です。

南無阿弥陀仏と念佛を申し、「四海之内皆兄弟」として生きようというサンガが生まれていた。それが仏法者と権力者とによって破られ、壊されていったのです。当時、念佛の仏法に出遇つて深いのちの交わりを歓び、いのち尊しと生き始めた人々を、実は仏法者が破壊しようとしたのです。法難とは、そういう事件だったのです。しかし、親鸞聖人はそういう法難を通して、「淨土の真宗は証道いま盛なり」と見出してくれるのです。人々がお念佛に遇つて生き生きと生きていく姿が見えていたのでしょう。

## えらばず、見捨てずの生活

念佛申すということは、我々が与えられて生きているいのちの世界は、平

等といっただくことでしよう。平等といふのは、選ばずということです。都合のいいものを選び取り、都合の悪いものを選び捨てる。こういうものが我々の生活の事実でしよう。如来様は、「選ばず、嫌わず、見捨てず、共に」ということでしよう。南無阿弥陀仏というのには、こういう意味でしよう。

南無阿弥陀仏というのには、「如来わらと共にまします」ということなのです。如来は、選ばず、見捨てず、共に尊敬と信頼をもつて「えらばず、みすてずの世界に帰ってください」と私たちに声をかけて下さるのです。こうでなければ、「あれはだめだ」と他を非難し、自分に対しても思い通りにしようと苦しんでいるのが私たちではないでしようか。皆さん、自分の顔を見て「ああ尊い」と拝みますか。

いのちあるものをそのまま、いのち自身の豊かな感性と深い願いを信頼し、尊敬し、大切にして、これを護り、持ち、養い、育む。そこに真実の生き方があるのでしよう。いのちは、生まれた時にみな平等のいのちとして、すでに完成して生まれてきてているのです。

ただ、そのいのちの真実を学び知つてそれを生きるということが、私たちが「どうしてもしなければならないこと」だと教えられているのです。

この頃、死刑が問題になっていますけれども、「たとえ人を殺した人でも、死刑にするのはやめましょう」と誰か

いらんもん

いったでしようか。きっと、お釈迦様は言ったに違いない。そして、親鸞聖人がおっしゃった、法然上人がおっしゃったのでしょう。人はその生まれてきた時に、殺人者になろうと思って生まれてきたものは一人もおりません。共に在るものと共に生きたいと生まれて来たのです。これは事実であり真実です。

四苦八苦

て、自分のことをそういうふうに言うのですが、本当は、誰も自分のことをそう思っていないでしょう。そうでも言わないと、自分を保てないと思い込んでいるのでしょう。

だから、自分のことをそんなふうに言う必要はないんです。そのように言っていると、子や孫にそれが伝わっていくのです。歳をとつて金儲けもしないようなものは、「いらんもん」で「間に合わんもん」ということになつて、小さい子どもたちまでが、それを価値観としてしまうのです。これは恐ろしいことです。

仏法といつてもそれは「如来の大慈悲」といわれるものです。それは「いのち尊し」であるし、「自利利他円満」の法です。私もあなたも共に平等を生きていこう、そういうふうに歩んでいく法が仏法です。

合はないかと計らっているのです。これを仏智疑惑と仏は教えておられるのです。仏様の智慧を疑惑して、人間の浅知恵を持つて人生を渡ろうとして四苦八苦しているのが私たちでないでしょうか。

私たちは、自分の思い通りにならないくて、四苦八苦というのです。しかし、思い通りにするというのは、今の事実を認めないことでしょう。事实上立つことが大事なのでしょう。事实上立て今為すべきことを荷負って生活することが、眞実に生きることでしょう。

仏法といつてもそれは「如來の大慈悲」といわれるものです。それは「いのち尊し」であるし、「自利利他円満」の法です。私もあなたも共に平等を生きていこう、そういうふうに歩んでいく法が仏法です。

四苦八苦の「四苦」というのは生老病死です。今回東日本大震災が起っこつて、報道は山ほどされるけれども、テレビにも新聞にも死体は一つも映っていないのです。そういう報道は問題だと思います。きちんと受け入れなくてはならないことです。そういう形で死んでいくこの身であり、そういう自然災害に遇わなくとも死んでいくこの身だということを、きちんと受け取らなければならぬのです。それがないから、世の中が壊れていくのでしょう。人間の関係が壊れていくのです。

## 法難の時代

学校現場でなぜ念佛申さないのか。お互いに尊敬と信頼を持って、大切なのちあるものを護り、保ち、養い、育むのが学校でなければならぬのでしょう。ところが、点数をつけて、お前はいい、お前は悪い、と評価され、だめだと言われた子は、みな生きられない。小学四年生の子が、生きることに疲れて自殺するようなこんな国はない。そもそもじやないでしよう。これを法難と言わずして何と言うのでしようか。

今まさに法難の時代だと思います。朝から晩までテレビは経済問題を徹底して報道しています。損した得した、うまいものがあるか、ないかという話題ばかりが目につく。それは人間の本質を見失っていることでしょう。

私なども、如来様の教えをおろそかに聞いてきたということを、いよいよ知られます。自分さえよければいい、という聞法をしていると知らされます。今回、法難をテーマとして語りなさいと言われた時、教えられたことは、今日も法難ということが目に見えない形で広がっているということです。それは、比叡山の僧侶でもなく南都興福寺の僧侶でもない。誰であろう、念佛念佛といってきたこの自分ではないかということです。念佛に出遭った者の証は、今の時代社会の問題を荷負って、念佛相続することにあると思うのです。私たちには念佛を申しながら、念佛の行です。如来さまの念佛です。その

ことを疑い、南無阿弥陀仏とさえ言えないような人間になり果てていた。衣を着たまま電車に乗れない、街にもいけない。昔はどこへ行っても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称える声が聞こえたけれども、この頃は、称えて下さいといつてもなかなか声に出ない。皆さんは、南無阿弥陀仏と声に出せますか。一度大きな声で称えてみませんか。

## 念佛者は世界中にいる

若い僧侶が、「教行信証」を読んでみて、浄土真宗キリスト派とかイスラム派というものがある、ということがわかった」と言うのです。つまり、キリスト教やイスラム教の世界にもちゃんと念佛者がいる、ということなのです。彼は、「いのちは等しく、尊い」として生きておられる人は、山ほどおられるのだということを言っているのです。世界中に念佛者がいっぱいおられる、ということです。「浄土の真宗は証道今盛なり」と。浄土の真宗は、世界中に証しがあるということです。

いのち等し、尊し、というところに目を開いた人は、今一気に世界中と一緒にになった。一如のいのちのところに帰ったのだということなのです。それを、即得往生と言うのでしょうか。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と私たちに声を掛けてこられていながら、念佛の行です。如来さまの念佛です。その

如来さまの行を受けて、今度は私たちが、南無阿弥陀仏と如来様に順って、如来さまの心をいただいた生活をするのです。私がするというよりも如来さまに促されて、あなた大丈夫ですよ、私もあなたも等しいでしようと。自分が差別されたり傷つけられたりしたら、みな同じいのちなのにと気が付くでしょう。いのちといつても人間だけではないですけれども、みな同じいのちなのに、等しいのに、なぜ差別するのか。なぜ「いらんもの」だと言うのかと、よう。いのちといつても人間だけではないですけれども、みな同じいのちなのに、等しいのに、なぜ差別するのか。

その他の如来さまはどこにおられますか。お寺の本堂に立っておられるのは、攝取不捨を表していて、あなたはそのまままでいいのですよ、と立っておられます。けれども、そのままということは、あなたの考えではなくて、こ

の与えられたいのち、存在そのものを、選ばず、嫌わず、見捨てず、皆等しい存在ですというふうにいつも立っておられるのです。座ってはおれないとい

## いのちの源

如来様は、私たちと共におられて、毎日働いておられるのです。いのちのまことを如来様と言うのです。苦しみから解放されたいと思う人は、如来様の声が後ろから少しづつ聞こえてきているのです。私はこのことによつて目が開いて、共に生きる道を選びました。得ることができました。それが往生淨土の道、願生淨土の道です。こういうふうに親鸞聖人は、法然上人からいただき、それを伝えてきました。実は「即得往生」と親鸞聖人がおっしゃつたのですが、我々も如来の教えを聞いたら、一举に淨土を回復するとおっしゃっているのです。

「あなたはそのままでいい」と聞いた人は、お釈迦様が最初でしょう。だから、南無阿弥陀仏というさとりを得たのです。南無は、いのちの源へ帰れ、苦しみを負うているということは、いのちに背いているというお知らせです。苦しい、悲しい、傷ましい、とういう事実は、いのちの源へ帰れと、いのちそのものから求められているのでしょうか。いじめに遭つたりしたら、もっとやれとは言わないでしょう。

「あなたはそのままでいい」と聞いた人は、お釈迦様が最初でしょう。だから、南無阿弥陀仏というさとりを得たのです。南無は、いのちの源へ帰れ、苦しみを負うているということは、いのちに背いているというお知らせです。苦しい、悲しい、傷ましい、とういう事実は、いのちの源へ帰れと、いのちそのものから求められているのでしょうか。いじめに遭つたりしたら、もっとやれとは言わないでしょう。

私たちが与えられて生きているいのちを、自分が準備して生まれたのちを、自分が準備して生まれたのちを、自分にまでなつているの世界から生まれて来ているのです。しかし、私たちには、あたかも人々を生み出し助けてやつてているような勘違いをしている。我々も間違えて、それをそのままにして認めてい

るようなものです。そういう傲慢な意識が私たちです。このいのちは、みな同じ一つの、もともと何も無い無色透明とでも言うか、「心もおよばれず、ことばもたえたり」という世界から出てきたのです。あらゆる、この世的、人間的思考の世界からは隔絶された世界から生まれて来たのです。死んで行くというのは、そこへ帰るのです。それは当たり前のことです。ですから、死んだら天国へいったとか、あの世へ行つたとか、というけれども、それはいのちの故郷、淨土に帰つたのです。本来の世界に戻つたのです。

### ありがとうごめんなさい

ある六十歳前ぐらゐの奥さんが自分の母親を亡くしたんです。その母親は大変苦労をした方でした。亡くなる一週間ほど前に、「私の人生ってなんだつたんだろう。楽しいことは何もなかつた」と言つたそうです。母親が亡くなつても、その声が耳に残つていて、毎日聞こえてくる。どういうことでしようと相談を受けました。

その奥さんは母親から大事にされていたといふので、「愛情いっぱいの人生成でした。ありがとうございました」と答えればいいのでしょうか、と申しますが、その奥さんの問い合わせ、私の中からそういう言葉を引き出したのです。そうしましたら、その奥さんは、暗い

顔をしていたのに、いっぺんに明るくなりました。きっと、奥さんはずっと心の中で、愛情一杯の母親を思つていたのでしょう。みなそういう体験をしておられると思います。それは世界中に通じることでしょう。

ですから南無阿弥陀仏、アミーダというでしよう。永遠不变にして普遍なる真実でしょう。普くいきわたつていて真実であるもの、それを本願というのでしょうか。一切生きとし生きるものに通じてはたらくのです。それが本願の第一番目の願に、

たとい我、仏を得んに、國に地獄・  
餓鬼・畜生あらば、正覺を取らじ  
(聖典十五頁)

### 健康な心

通じ合わなくて苦しみ合い、悲しみ合ひ、傷み合う環境を地獄と申します。いくら求めて得られても、満足ということが分からぬあり方が餓鬼道です。そして、生きることに自信を失い、責任を持てないあり方が畜生道です。このような在り方は、私たちの日頃の悩みです。どうしてそうなるかと言えば、それは自己中心だからと本願の教えは教えています。

大事なことは、いつも自分の生きることに責任を持つことができるのです。それが、本願力でしよう。何か問題が起つたら、ちゃんと引き受けるということ。間違えたら「ごめんなさい」と言えることです。本当にごめんなさ

いといえる時が必ず来るのです。それは、いのちが持つている健康な法則なのです。それを本願と申し上げるのでしょう。

その本願力に自分の闇が破られた時に、ああ如来さまだ、とこう言ったのです。いのちの真実が私の眼を開いて、いのち平等の世界を本当に回復させて下さった。だから、傷つけて、差別して、そして自分も嫌な気分になつてたのが、ごめんなさいと、元の光の世界に帰ることができた、ということなのです。

その本願力に自分の闇が破られた時に、ああ如来さまだ、とこう言ったのです。いのちの真実が私の眼を開いて、いのち平等の世界を本当に回復させて下さった。だから、傷つけて、差別して、そして自分も嫌な気分になつてたのが、ごめんなさいと、元の光の世界に帰ることができた、ということなのです。

法難と言いましても、外側にあるものではないのでしょうか。仏法を世法で解釈して、自分の利益のために利用しようとしても、これはまるで方向違いです。念佛というのは、すべていのち自身にいきわたつていて、一時も休まずはたらいている願いであつて、人間の生き方、歩む道を健康に回復させる法則なのです。その法則を、すでに遭遇している先師の教えに聞いて、そだと頷くとき、お互いにそのことを知らせ合つて学び合つていふことが、人間を豊かに生かすのです。そのように生きる人を、念佛者というのでしょうか。

人生、長からうが短からうが、病気であろうが健康であろうが、本当の意味で、一生涯健康な心で生きられる法

が念佛です。だから、キリスト教にもイスラム教にも、さまざまな宗教の中に念佛者がいっぱいおられるということでしょう。

法難というのは、私ども自身が抱えている法難という問題です。私たちの生きる世界が、五濁の世となつてゐます。「どうか南無阿弥陀仏といのちの根源に立ち返つて、いのち自身の念ずるところ、命ずるところ、いのち自身の真実であり豊かな願いである本願の法を念じて生きるものになって下さい、念佛申して生きてください」と、お釈迦様のメッセージがあり、同時にそれは親鸞聖人のすすめでもあります。

私たちの世界が濁つてゐるといふことは、自己中心の在り方がその原因だと言えられています。仏の教えを疑い、誇り、捨ててしまふ結果、念佛する者を罵倒し、殺しさえしている。しかもそれは、仏法、仏法と言っている私たち自身ではないかと思うのです。自分の名譽や利益のために本願の教えを利用しようとする。これが仏智疑惑と言われているのです。そしてこれが罪なのです。法難というけれども、自らの内にある仏智疑惑です。「ほとけごころでは生きられない」とよく言われますが、そうではないのです。仏心を見失つてゐるから、世の中、我と我が身が腐つていくのでしよう。ずっと、そのように教えて頂いております。

## 「親鸞聖人に遇うつどい」を終えて

一〇一〇年度、富山教区では、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を迎えるにあたり、「宗祖としての親鸞聖人に遇う」という御遠忌基本理念を基として「親鸞聖人に遇うつどい」を企画・実施した。この「つどい」は、教区門徒会からの提言にある「僧侶と門徒との隔たり」を埋める場として開き、今後もそのような場を開いていく「人（にん）の誕生」を願いとして開催された。

### 富山教区御遠忌委員会教化専門部会部長より

第十三組 蓮通寺 河村 浩

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌も終了し、それぞれの地、それぞれの部門で総括が始まっています。

当地でも、きちんとした総括は時間をおかけてしっかりとしなければならないのですが、今は、私の主に個人的な感想・反省を述べたいと思います。

「親鸞聖人に遇うつどい」を各組で実施していただきましたが、当初考えていたものからは大分後退していたようです。

最初の予定では、座談会を行い、その司会者には門徒会員、同朋会会員な

とに、とても苦労があつたようです。そのため、参加者に更なる負担をかけるようなことはやりたくない、ということをあちこちで聞きました。私たち、危機感を持たなければなりません。

「あなたたち（僧侶）の言葉は全然

### 「親鸞聖人に遇うつどい」講師より

第十三組 明光寺 野田博俊

本年、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌にあたり、御門徒の方々の前でお話ををする機会をいただいたことは、大変に貴重であり、まさに千載一遇のことであったと感じております。

私が親鸞聖人に感動したところ、もとと言えば仏様の教えに対する親鸞聖人の想いや願いが当てられたところを門徒さん方々の前でブチ撒けさせていただくことで、ただ私たち僧侶が知的好奇心のためだけに仏教を学んでいるのではないかということを知っていましただけではないかと思っております。

よ

良い言葉に出遇ったことに感動するのではなく、ただ自分の知識の引き出しに言葉をため込む作業に邁進することで満足してしまう。そんなガラスケースに入った親鸞聖人を眺めるような勉強から「僧侶も門徒さんも開放されましようよ。親鸞聖人が出遇った感動と一緒に感動しましようよ。」と、これから学びの道筋を作っていくための一步が踏み出せたのではないのでしょうか。

そう言っている私も、講師としてお役目を頑っておきながら申し訳ないのですが、当初からこんな殊勝なことに思い至っていたわけではなくて、会を重ねるうちにこういったことに気付かせていただきました。そして正にこの初の目的を外れ、仏教の中に「使える言葉」を捜す作業になってしまいがちです。

届かない」という門徒会からの提言を切実に受け止めなければなりません。次には、富山教区・富山別院主催の宗祖御遠忌法要が行われます。今回の総括がきちんと生かされていくものになるでしょうか。

## 実施報告書から見えてくること——反省会に参加して——

第十組　淨光寺　齊藤弘顕

「各組宗祖親鸞聖人に遇うつどい」の開催については、前号に既に掲載されていますが、その実施状況と、つどいの講師及び各組組長から提出された報告書を元に反省会が開催されました。

まず、実施状況についてですが、各組実施形態は様々ですが、教区全体として数値だけを記載すると、

- ・事前のつどい＝四十四箇所・参加者約一八〇〇人

- ・事後のつどい＝十四箇所・参加者約五〇〇人（他の法座との兼修も含む。）

と事前事後で大きく異なるものが表れています。

次に報告書ですが、①事前のつどいとのつながりを考える」の総評三項目を念頭において、それぞれに所感、課題等が記されています。

つどいの実施形態の各組での違いや、第一期法要での混乱ということもあります。報告書から何かをまとめていくことは不適切かもしれません、各項目で挙げられた意見の中から代表的なものをピックアップして私達一人一人が今後について考える一助としたいと思います。

- ・「つどい」の開催自体は意義ある事だったと思います。
- ・事後のつどいについては、積極的な

参加の促しが不十分であったと思いません。

- ・実際に御影堂に身を置いて感動したという声が多く、場が与える力の大きさを感じた。

- ・御遠忌参拝後の門徒方の反応は大変真摯なもので、真宗に関して丁寧な質問をいたたくことが多くなりました。

- ・「門徒と寺とのつながりを考える」時、寺側、門徒側双方の「願い」は必ずしも同じではないと思います。

そんな中、寺側は自分達の「願い」を明確に伝えるとともに門徒側の「願い」もしっかりと聞いていかなくてはならないと思うが、はたしてこれがどこまでできているのだろうか、と感じます。

・「門徒と寺」という時、「同じ真宗門徒」というところに、どこまで立ち続けることが出来るか、ということが課題であると感じる。「教化する側」「教化される側」という線引きがされてしまいそうな現状を、特に寺側は問い合わせていく必要があると思います。

- ・みんなの寺であるにもかかわらず、門徒の方にお任せするという気骨が寺方にかけているように思える。（寺方は都合の善し悪しで門徒方を

お客様扱いしている場合が多いのでは……）もつと共々に悩み相談し、教化活動を実践していく姿勢が寺方に問われていると思う。

いきなり「親鸞聖人に遇う」と言つたら参加者が離れていかないだろうか、ということが何か引っかかってきました。実際、団体参拝に際しても「親鸞聖人に遇う」と呼びかけなかつたところに、その場を信用していない自分の姿が浮き彫りになっていました。

以上、わずかではあるがこれらの意見の中から、おぼろげに今現在の門徒と寺とのつながりの現状の一端、門徒と寺がどのような形でつながっているかが浮かび上がってくるように思われます。特に「門徒方をお客さん扱いしている」という言葉にはドキッときさせられます。私が身を振り返ってみると、そのことを否定できない自分の姿があります。そしてこれらの意見は同時に、今後特に僧侶と門徒との関係を考えてゆく方向性も示唆していると受け取ることが出来ます。

一方、ここにはもう一つ「寺」とは何であるのか。「寺に集う」ということは、どういう意味を持つのか。このような問いを投げかけている側面も持つていると思われます。もちろんこのことは、僧侶と門徒との関係と切り離して考えられることではないと思います。



## 第五十一回児童研修大会

—みんなでつくろう三日間—

昨年八月二十四日～二十六日、富山市山田村の「富山市子どもの村」において参加児童五十九名、参加スタッフ三〇名での児童研修大会が開催されました。

昨年度は、宗祖御遠忌法要厳修、東日本大震災発生と、共に生きる私達にとって深く心に刻まれる大きな出来事のあった年であります。



青少年教化小委員会では活動内容を決めるにあたり「みんなでつくろう三日間」という大会テーマを掲げました。

初日、教区災害復興震災ネットワークより東日本大震災の話があり、子ども達は静かに耳を傾けていました。

二日目、野外炊飯では食を通じて子ども達に当り前の生活がある事の大変

さと大きさを感じてもらいたいという願いから「一日三食自分で作る」活動を作しました。また食事の合間に箸も自作するスタッフ自身もかまどで煮炊きをすることがほとんどないため、事前研修を経て本番に臨みました

が人手不足もあり子ども共々四苦八苦しながらの食事作りになりました。

第九組 深妙寺 田辺正徳

好きな色を選んでもらって手形を押す作業をしました。一人一人アクリル絵具を手に取る時は楽しそうでしたが、真白な打敷を前にすると少しだけ緊張した面持ちで手形を押していました。

また今回は開会式と閉会式を別院本堂で行い、最終日にはこの打敷を前卓（まえじよく）にお掛けして全員下陣（げじん）でお勤めをしました。下陣から眺めるカラフルな打敷は一生懸命お勤めをする子ども達の姿とともによく合っていました。解散後、迎えに来られた父母を前に自分の押した手形をうれしそうに指差していました。



教区讃仰事業 二〇一一年八月二十八日  
会場／真宗本廟(東本願寺)視聴覚ホール  
**「昆布ロードコンサート」を終えて**  
—知っていますか？琉球王国、そして沖縄を！—

三月十一日に発生した震災の影響で、コンサート等の自粛を本山から通達された教区讃仰事業「昆布ロードコンサート」が八月二十八日(日)に、真宗本廟視聴覚ホールで開催されました。  
単なるコンサートならば開催を見送りましたが、中途半端な学びよりも今

スタッフが中心となつて学習を重ねるうちに知らなかつたことを知ることの重要性に気づかされる事になりました。「昆布ロード」をキーワードに挙げるならば、アイヌ、北海道開拓の問題が含まれるのはおかしいとの指摘もありましたが、



回は沖縄を中心に学びを深めました。今まで、NHKで放送された「ちゅらさん」の影響で少なからずとも沖縄をスタッフは知っていました。ただ、それはあまりにも沖縄を美化した放送であった事が判つてきました。では、何を富山教区として問題提起し発信するのか？それが各自の問題になりました。

当日は単なるコンサートとしてのイベントとして終わるのではなく、富山教区讃仰事業実行委員会のスタッフとして富山教区から問題提起する場に変わろうとする動きが多く見られました。何故富山が沖縄なのか問われる方も多数いらっしゃいました。沖縄に一ヵ寺

しか真宗大谷派の寺院が無いことにおどろかれる方もいらっしゃいました。そういう質問をされながら参拝された方々は展示されたパネルに目をやり、一時沖縄が抱える諸問題を考えていらっしゃいました。

富山では情報の発信は少ないのですが、五月十五日は沖縄復帰を果たした日、六月二十三日は沖縄戦終了の日、そして今年は終戦（一九四五年）から六十六年が過ぎました。さらに終戦の六十六年前には琉球処分（一八七九年）が行なわれていました。

第十一組 光徳寺 石川玄雄



コンサートは、二十八日に合わせてアメリカから帰って来てもらったSwing MASAさんの死刑制度の問題提起に始まり、新垣優子さんの島唄で沖縄の風を感じ、佐渡山豊さんに沖縄を受けた事実を再確認させていただき終了しました。最終的には百五十人の方々に教区讃仰事業に足を運んでいただきました。

## 第三十四回 北陸連区差別問題研修会 『浄土を願う』—原発事故・放射能被害から問われる自己—

昨年八月三十日～三十一日、山中温泉ホテル翠明にて北陸連区差別問題研修会が開催されました。今回のテーマは『浄土を願う』と題し、三月に起きた東日本大震災における原発事故を受けて、原発の問題について理解を深め合いました。今回の研修には富山、石川、福井の三県の各教区の他に、原発

スタッフ全員で作ったシーサー（二十体位ありました）は、二体を残し参加された方々の家庭へ引越しました。ただ、これからも沖縄に思いをよせる日、また、学びの場を構築していく事をスタッフで確認し反省会を九月十四日に終えました。



行されました。

講師のお二人からは、福島第一原子力発電所の事故を踏まえて、原子力発電所をとりまく行政と電力会社との癒着の構造、被曝労働者の実態、放射性廃棄物の脅威など他にも多くの指摘があり、その多くは日ごろの私の生活の中ではあまり耳に触ることのないものでした。また、班別座談やパネルディスカッションでは、参加者各々の原発に関する思いや考え、現状などを話し合い、活発な議論がなされました。

東日本大震災から八ヶ月以上経った現在でも、被災地では援助を必要とし、先の見えない生活を送っている方が多くおられます。特に福島県では、多くの児童が内部被曝しているといわれ、その影響を心配しながら不安の日々を送っておられる人々がいます。また、

北陸地方にも多く原発は建設されており、いつ何時福島のような状況になるか解らない状況下で私たちは生活しているように感じます。決して原発事故は対岸の火事ではないように思います。対の方も両方おられると思います。しかしながら、そのいずれにしても社会、特に経済との関係の中で双方の意見が割れるのではないか。その人のおされた社会の立場という業の中で、私たちには各々の考え方を主張せざるを得ません。そのようなわたしの業、和田禪師は「内なる靖国」を問題とされましたが、私の「内なる原発」が信仰の問題として大きく横たわっているように思います。

特に経済との関係の中で双方の意見が割れるのではないか。その人のおされた社会の立場という業の中で、私たちには各々の考え方を主張せざるを得ません。そのようなわたしの業、和田禪師は「内なる靖国」を問題とされましたが、私の「内なる原発」が信仰の問題として大きく横たわっているように思います。

た。



式だけを追求する作業になってしまつていると感じた。やはり掛役として法要に携わることは、講習会でも幾度も仰っておられたが、御崇敬の気持ちが最も大切なではないのかという反省が残った。私にとつても一度、報恩講の意義を考えさせられる、そういう講習会になった。

今後は掛役会だけでなく、富山別院

の報恩講に参加された全ての有縁の人々が御崇敬の気持ちの中で、達成感や更に盛り上げていこうという気持ちが持てる「富山教区 富山別院 報恩講が富山教区全寺院の報恩講」という形になればと願う。

この講義で学んだ事を、普段の法務の中でも活かせるように意識して取り組んでいきたい。

第十組 西元寺 神保央至

昨年から富山別院では報恩講での掛役の技術向上のため、掛役会が立ち上げられた。有り難いことにその一員として昨年、そして今年と掛役として報恩講に携わることができ、今回の報恩講では御伝鈔の練り出し、練り込みの蠟燭持ちをさせていただいた。掛役の講義では、正確で素早く美しい動作を意識し、頭の先から足の先まで神経を行き渡らせ動き、自分たちも内陣とい

う淨土の莊嚴の一部になつた気持ちで所作を行うようにと教わった。当日も、御伝鈔拜読者、御伝鈔卓持ち、蠟燭持ちが一体となり、動き自体も莊嚴でなければ、いわば見せる動きを言うのであろうか、そういう気持ちで出仕した。今、報恩講を終わってみて思うのは、自分のことで精一杯だったということ。これでは、儀式執行にのみ囚われて形

## 富山別院 声明作法講習会

主催 富山別院

テーマ 報恩講における儀式・声明作法の心得

去る二〇一二年、十月六日から八日までの三日間、富山別院報恩講が厳修された。その報恩講に先立って九月十二日に御本山から本廟部式務所堂衆の松村大栄氏、本廟部式務所參衆の熊谷祐宏氏をお迎えし、声明作法講習会が行われた。内容は報恩講においての声明作法と、掛役の作法についてであつた。



主催 富山教区災害復興支援ネットワーク

## 被災地視察 —陸前高田 本稱寺をたずねて—

見て、感じて、忘れない、《現地学習》

九月二十一日から一泊一日で被災地視察旅行が行われました。長い移動時間にもかかわらず年配の方も多く参加されました。一日目の仙台教務所の復興支援センターでは、支援活動の現状などを聞かせていただきました。そこでは、別院を利用して五月からボランティアで活動する人たちの宿泊所としているそうです。二日目の気仙沼では本稱寺跡地と仮本堂を見学しました。



跡地の瓦礫は撤去されて折れた門柱しかしなく、周りの建物も基礎がむき出しとなり、震の激しさを目の当たりにさせられました。

副住職より  
仮本堂で  
「被災地が  
一番恐れて  
いるのは、  
このまま一  
年も経つと忘れられてしまうのではないか」という話を聞かせていただきました。私は支援を途切れさせないよう忘れないと自分に居心地の悪さを感じていました。



都市で、門徒の方々にとつて縁のある土地です。よって、漁の技術を学び合うために釜石に移住した人もいて、被災した知人や親類を心配する人たちが少ないと聞きます。私には被災地に親しい知人はおらず、心配する人たちに対してかける言葉が見つからず、ただ、話を聞くことしかできない、そういう自分に居心地の悪さを感じていました。



した理由は、被災地の状況をこの目で見てみたい、知っておかなければならないという気持ちであって、最初は見てきたことを伝えるといつたことは考えていました。しかし、被災地の状況や復興支援センターのスタッフの話、被災した人の話を聞くうちに自分で何かしたいと思い、自坊のお講で写真を見せながら簡単な報告会を開きました。これから報恩講が始まり、人がたくさん集まる機会も増えて被災地の現状をより多く見てもらえると思います。



## 「富山教区・富山別院

### 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要

#### 厳修に向けて

##### —富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要委員会—



御本山における宗祖御遠忌法要も終わり、これからは各教区・各別院での御遠忌法要の厳修が期されることなります。富山教区・富山別院でも、二〇一一年二月から「御遠忌法要検討委員会」を設置し検討を進めてまいりました。その結果、御遠忌法要を厳修することで意見がまとまり、「富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要委員会」を設置する運びとなりました。

去る九月二十六日に第一回の委員会を開催致しました。その会議で法要厳修時期を二〇一四年五月二十三～二十五日とすることが確認されました。前回の教区・別院の御遠忌法要から六年しか間隔がなく、時間的にも厳しいことも話し合われましたが、宗祖の御遠忌法要であることから時期を逸することなくお勤めすべきとの判断に到りま

した。今後、法要計画の策定を進めて参りますが、教区・別院の現状に即した意義ある法要を目指して取り組んで参りますので、教区の皆様の御意見をお寄せ頂きたく存じます。教区内の皆様の御協力なくして法要の厳修は望めません。法要厳修へ向けて教区内各位の御協力をお願い申し上げます。

委員長 繩田普善



このを受けて二〇〇九年、遅まさながら組織拡充小委員会主催で同朋会議を開催し、多くの方々に集まっていただき、教区の現状について話し合われました。その中で、教区会と教区門徒会、組会と組門徒会との間に、つながりがないことが明らかになりました。僧侶は、自ら所属する寺院から、

門徒研修小委員会幹事 北條秀樹

## 組門徒会役員研修会開催

### —門徒研修小委員会主催—

門徒研修小委員会主催により、組門徒会役員研修会を、九月二七日から二八日かけて宇奈月温泉・延対寺荘を

会場に開催いたしました。

これは周知の通り、二〇〇八年度に富山教区会議長・富山教区教務所長・御遠忌お待ち受け体制検討委員会委員長宛に、「門徒会からの提言」が提出されました。しかし、教区教化委員会に提案される教化事業は、相も変わらず助成事業の繰り返しで、変化も危機感も見られないまま推移しておりました。

これを受けて二〇〇九年、遅まさながら組織拡充小委員会主催で同朋会議を開催し、多くの方々に集まっていただき、教区の現状について話し合われました。その中で、教区会と教区門徒会、組会と組門徒会との間に、つながりがないことが明らかになりました。僧侶は、自ら所属する寺院から、



門徒会会員や推進員、同朋の会会員など

を推挙はするものの、それ

ぞれの使命・

内容を伝えな

いたために、寺

と門徒との間

に不信感が生

まれる結果となってしましました。ま

さに無責任行為と言わざるを得ません。

今回の研修会では、門徒・僧侶が集

い、忌憚の無い意見が飛び交いました。

そのほとんどをご門徒の意見が占めた

のですが、寺院や僧侶の現状に憂えて

いる声を多くいただきました。今後も、

このような門徒・僧侶が共に語り合い

確かめ合う場を継続的に開いていきた

いと思います。そして、そこに提出さ

れたご意見を真摯に受け止めて、教化

事業に反映するよう取り組んでいきま

〈参加者〉

【九組】飯田久行（参議会議員・教区門徒会員・組門徒会副会长）・五十嵐淨和（副組長）・上山文治（教区門徒会長・組門徒会長）・長守覚昭（門徒研修小委員）・藤岳貴之（組長）・源大寿（副組長）・牧田慶一郎（組門徒会員）・丸山忠正（教区同朋の会副会长・組同朋の会会长・門徒研修小委員）  
【十組】犬島孝昭（組長）・平本泰準（教区同朋の会副会长・組同朋の会会长・門徒研修小委員）・松本弘行（教区門徒会員・組門徒会会长・門徒研修小委員）  
【十一組】岡部清一（教区同朋の会会会长・組同朋の会会長・門徒研修小委員）・佐近和夫（参議会議員・教区門徒会員・組門徒会長・門徒研修小委員）・中島賢（組門徒会員）・中橋敏則（教区門徒会員・組門徒会副会长）・蜷川晃（組門徒会員）  
【十二組】池原真人（副組長）・浦島弘義（教区同朋の会副会长・組門徒会副会长・門徒研修小委員・組同朋の会会长）・大林光雄（教区門徒会副会长・組門徒会長・門徒研修小委員）・轡田普善（教区会議長）・野畠正應（教区副会长）・大林光雄（教区門徒会副会长・組門徒会員・組門徒会員）・藤田薰（組門徒会長・門徒研修小委員）・轡田

活動はそれぞれ別々で、連携していな  
いですね。

**牧田** 皆さんには、大谷大学出身ですよ

ね。だからお寺さんは、仏教用語を  
知つておられて説教をなさる。私は、  
寝てしまふ。正信偈についても分からず  
ないから、別院に聞きに行つたり、お  
寺に行つたりしている。仏教用語は世  
間と正反対。例えば、他力。人に助け  
てもううことが世間一般で使う意味と  
いったところです。門徒が浄土真宗に  
無関心なのは、仏教用語が分からない  
し、聞くこともしないし、毛嫌いして  
しまっているのではないか。お寺さん  
は、もっと分かりやすい言葉で話して  
欲しい。こういう思いを分かって、僧  
侶は説教して欲しい。門徒も僧侶も平  
等である。僧侶方は威張つていてはい  
けない。

**平本** 本日参加三四名のうち、誰がお  
寺で誰が門徒か分からぬです。十  
一組、十三組の方はあまり来ていな  
いようです。

**高菜** そうですね。顔が分かりません  
ね。それでは自己紹介を皆さんにして  
いただきましょう。

### ～自己紹介～

**高菜** それでは、どなたからでもお話  
いただきたいと思います。

**木本** 最近は法話、昔は説教といつ  
て、普ダウンとして、住職の考え方を述べ  
るような感覚があります。説教はトッ  
プダウンとして、

法話・説教ということばに定義がある  
のか？両方の言葉は違うのか？何か  
感覚的なことでもいいので教えてくだ  
さい。

**辻森** 自坊でも、私の小さい頃は説教  
と張り紙をしていました記憶があります。  
現在は法話と書いております。教団と  
しては、本願寺派（西本願寺）は布教  
使として位置づけていますが、大谷派  
には制度がありません。昔はご門首の  
お説教をご親教、新門（門首後継者）  
のお説教をご示教と言つておりました。  
僧侶のことを教師と言いますが、真宗  
同朋会運動以来、僧侶一人一人が法話

をしていく。先ほど、朗読しました宗  
憲のように、それぞれが法話をする。  
大谷派は現在、布教使でなくて教導と  
いっています。駐在教導もそうです。現状  
において、このことが地方の寺院まで  
伝わっていないのではないかと思いま  
す。ですから、説教といつているこ  
ろもある。教団の流れとしては、こう  
いうことだと思います。

**大林** 「ご覧のよう」に参加者がたいへん

少ないのですが、少ないので、  
ばいられないことは、各組においてこの  
場に参加していないお寺さん・門徒さ  
んをどうにかしないといけないという  
ことです。ここに参加されている皆さ  
んに、むしろ感謝しなければいけない。  
門徒の中には、定年してから次はお寺  
に骨を折ろうと思っている人もいる。  
そんな中で、このような会議の席では  
「宗勢は下降線だ」と言われると、私  
も辞めたくなる。二〇〇八年の「門徒  
会からの提言」を出された人は、たい  
へん大切なことを言っておられるとは  
思うが、人の心を傷つけるようなこと  
は言わないで欲しい。（二〇一〇年四  
月一四日に行われた教区及び組の改編

に関する説明会の開催を受け、門徒会  
員の中から教区門徒会のあり方につい  
て、「七〇年余の無改革を重視してい  
るが、門徒会の制度疲労についての認  
識がない。門徒条例には、門徒会は：  
①施設の審議、②運営の寄与、  
③相互の連帯…同信同朋の実を挙げる  
とあるが、年一～二回の総会で施設の  
審議を意見無く通過させるのみであり、  
教区・組の問題や寺と門徒とのつなが  
りなど危機的状況にある緊急の課題が  
話し合われたことが無く形骸化・無力  
化している」や「宗派の依頼額割当、  
教区費徴収、予算決算等を承認するだ  
けの門徒会になってしまっており、しかも全く  
意見がなく終つており形骸化の見本の  
ようになつてている」という意見を受け  
て)。

**青木** 門徒の任務の中に、おかみそり  
を受けなければいけないという表現  
がありました。私のいる集落は五〇  
戸ほどあり、そのうち約二〇戸が同じ  
手次寺院の門徒です。私はその世話を  
をしていますが、集落の若い人に、帰  
敬式受式のお願いをしてみたところ、  
「どうしても受けなければいけないの

か？」と質問されました。私は門徒の任務を勉強していないので、「これは心の問題ですよ」と伝えました。例えば、「法名を生きているうちにもらつておけば、亡くなつたときに安く済むから」というお話を聞いたことがあります。現在、過疎地においては、核家族でお寺とのつながりをなかなか持てない状況です。一〇年もすると、門徒は間違いなく減少すると思います。私がいま楽しみにして見ているのが、宇奈月の樹徳寺さんのホームページです。住職の実感日記を毎日書いておられます。「今日はどこへ行つてきた」「坊守はこんなことをしていた」と事細かであります。こういうのは、これから若い方に理解してもらえるのではないでしょうか。今日はたくさん住職が参加しているので、門徒への伝達方法をどのようにしているのかお聞かせください。

**高菜** 大林さんの参加者を増やしたいという意見は、私も富山教区に着任して六年半になりますが、つくづく富山教区は「寺と門徒のつながり」がないところだなと思います。例えば他教区では、住職、坊守、門徒会、同朋の会など、教区役員の全てが一同に会して行われる新年互礼会というものがあります。富山教区には五一会というもの



がありますが、住職のみの会ですね。二〇〇八年には教区同朋会議で、いろいろな役職の方が集まれました。今後、このような「寺と門徒のつながり」を推し進める事業を、どのように根付かせていくかが課題だと思います。そして青木さんが言われるよう、ホームページなどを利用して、門徒さんへの情報伝達や門徒さんとの関係を持つているお寺もあります。今後、門徒と寺院との接点を模索する必要があると思います。どうですか。ご参加の住職方、何か実際にいらっしゃることはありますかね。

**岡部** 同朋の会と門徒会のつながりはどうなつてているのか。それから各組の会に入っている門徒会長は、同朋の会に入っているのを聞きたい。要するに両方が一緒にうまくやらないと、お寺とのつながりもまづくなるのではないかと思っています。

高菜 岡部さんからですが、①同朋の会と門徒会のつながりはどうなつているのか。②各組門徒会長は同朋の会に入っているのかという質問です。教区入会勧説するとかしないといけないと思います。私（駐在）への講師依頼はあるが、教区内僧侶への依頼は盛んではない。そういうところからも、寺と門徒がつながっていないことが見えてきますね。

**浦島** 同朋の会の活動は各組で違うのですが、十二組は会員二三三名です。月一回、会を開催しています。中身は

がありますが、住職のみの会ですね。二〇〇八年には教区同朋会議で、いろいろな役職の方が集まれました。今後、このような「寺と門徒のつながり」を推し進める事業を、どのように根付かせていくかが課題だと思います。そして青木さんが言われるよう、ホームページなどを利用して、門徒さんへの情報伝達や門徒さんとの関係を持つているお寺もあります。今後、門徒と寺院との接点を模索する必要があると思います。どうですか。ご参加の住職方、何か実際にいらっしゃることはありますかね。

**岡部** 同朋の会と門徒会のつながりはどうなつてているのか。それから各組の会に入っている門徒会長は、同朋の会に入っているのを聞きたい。要するに両方が一緒にうまくやらないと、お寺とのつながりもまづくなるのではないかと思っています。

高菜 岡部さんからですが、①同朋の会と門徒会のつながりはどうなつているのか。②各組門徒会長は同朋の会に入っているのか。このような出席率だけでまとまってしまい同朋の会が増えない。その現実を打開しなければいけないと思います。私（駐在）への講師依頼はあるが、教区内僧侶への依頼は盛んではない。そういうところからも、寺と門徒がつながっていないことが見えてきますね。

**浦島** 同朋の会の活動は各組で違うのですが、十二組は会員二三三名です。月一回、会を開催しています。中身は



「正信偈・和讃のこころ」を講題に、本傳寺の若さんにしてもらっています。私も推進員になつた当初、同朋の会には参加しておりませんでした。

「推進員なら同朋の会くらい出ないといけない」と言われて、参加するようになりました。私が同朋の会に入った時には、参加者は一四～一五人だった。前会長の大林弘さんが熱心に活動され、現在では三三名です。推進員については、名簿から見ると七〇名程いますが、高齢になつたり、体の都合が悪くなつたりという方がほとんどです。やっぱり推進員になつたら、必ず同朋の会に入会勧説するとかしないといけない。どういう状態が「つながった」ということなのか。このような出席率だけでまとまってしまい同朋の会が増えない。その現実を打開しなければいけないと思います。私（駐在）への講師依頼はあるが、教区内僧侶への依頼は盛んではない。そういうところからも、寺と門徒がつながっていないことが見えてきますね。

**高菜** 十二組は、組でまとまっているのですか？

**浦島** 組でまとまっているのですが、地区によりバラつきがあります。魚津、黒部と分けるなど色々あります。会場を回しているのですが、貸してくれる

お寺がなかなかない。現在は本傳寺を会場に行っていますが、こういう関係が増えるといい。

高葉 寺が会場として貸してくれないという問題はありますね。同朋の会に参加される方の駐車場が無いとか住職が不在という問題があります。



丸山 九組は、組門徒会員に同朋の会に入っていたいだいています。住職（僧侶）も全員入っていただいています。会員は六〇名程で、会費は取っております。会員は六〇名程で、会費は取っております。毎月の第二土曜日の夜に講師を立てて開催している。参加人数は、平均約一〇名です。例えば八月はお盆、九月はお彼岸についてと、内容を時季により対応しています。推進員養成講座を受けた人にも入ってもらっています。

高葉 浦島さんのお話の中で、黒部地区は本傳寺の若院が講師をされていることですが、最近富山教区では、若手僧侶が頑張っています。寺族研修小委員会の教化事業である共学研修会へ参加する方も増えてきました。そして、自ら活動の場を開くということで、「富山大法話大会」や「教区災害復興支援ネットワーク」などを開催し

ております。今、若手の力を活かす場を開く必要があると思います。以前に、ある住職と「何故、富山教区の僧侶は勉強しないのか？」法話をした時に、「法話は、貧乏な寺（僧侶）がするこ

とだという昔ながらの感覚が現在でもあるのではないか」と教えられました。富山教区の未来を考えると、若手僧侶に現場を踏ませて育てていくことは必須であります。各地区での同朋の会を拡張し、講師を派遣していく方途を検討していかなければならぬと考えています。

#### 牧田

私は、九組同朋の会に参加しています。法話が終わった時に、聞く側はある程度の悩みもあるし、聞きたいこともある。もし講師が一時間話すなら、一〇分ほど話を切り詰めて、参加者の話を聞く時間を持つつながりを

持てていいと思います。私自身も同朋の会に参加し、講師の話で分からぬことをメモして後で聞くと、自分の気持ちとして納得できるし、ほかの人にも説明ができる。講師は、一つでも二つでも質問者の話を聞くようにしなければいけない。私がそういう構えでいると、家で息子にも伝えていけるし、息子もお寺に興味を持つようになる。

私自身、最近はいろいろと質問できるようになつた。是非、年中行事などでも質問できる雰囲気作りをお願いする。

教務所の方からも奨励してください。これも、門徒とお寺とのつながりだと

思ふ。

辻森 人生講座などでは、必ず質問の時間を設けておりで活用してください。

高葉 質問できるお寺作りですね。それでは少し休憩します。

#### 休憩

#### 高葉

さて今からは、①組門徒会と組会との関わり、②地元で組門徒会と手次寺院との関わりなどの地元の身近な問題についてお話をください。

#### 松本

十組は、富山教区でいえば一番人口が多いところです。今までお聞きしたところ、ほ

かの組では集落など地域のつながりがあるのを感じています。しかし十組では、そういうつながりがほとんどない。だから門徒がお寺に集まる機会というのは、永代経、ご満さん、報恩講の時だけです。それでも、どんどん人は少なくなってきて

参拝者が増えるために、老人のオアンス的な方途はないのか？ 例えば、帰敬式にお説いても損得でしか考えない。都市部特有といいますか、村や集落での関係性とは違い、金銭に関わることは見向きもしません。もっと横のつながりがあればと思います。そして

都市部では、法話を聞いても、ほとんどの方が寝ておられて緊張感がない。講師の話に、惹きつけるものがない。本来、真宗の教えというのは非常に大きな力を持っているのですが、それを言葉でうまく伝えられないのではないかと思います。お寺側の資質の問題です。説教、法話の熟達というか、話の内容が問題ではないかと思います。あまり難しいことを言つても伝わりません。高葉駐在が主催の若い人の集まりに参加したことがあります。若い人のなりの発想がある。そして、若い人は会話が面白い。若い人たちへの期待があります。まあ真宗に限らず宗教界全体にいえることです。今回の震災後においても、宗教界、特に真宗の前向きな熱の入れようには見直すを感じます。若い人が、私たちとは違った感覚で向き合っておられることに、一つの望み、明るいものを感じます。先ほど言いましたように、十組としても、



私は、組門徒会と組会との関わり、地元で組門徒会と手次寺院との関わりなどの地元の身近な問題についてお話をください。

松本 十組は、富山教区でいえば一番人口が多いところです。今までお聞きしたところ、ほかの組では集落など地域のつながりがあるのを感じています。しかし十組では、そういうつながりがほとんどない。だから門徒がお寺に集まる機会というのは、永代経、ご満さん、報恩講の時だけです。それでも、どんどん人は少なくなってきたて、いつも来る顔ぶれは一緒です。

**高葉** それで、寺院方どうですか？  
**飯田** 門徒と門徒会は違うんです。規定では、門徒総代は三人以上となってゐる。「三人以上」という数字が少なく感じます。総代数はどれくらいがよいのでしょうか？少なくとも集落に一人の時に機能するのが良いと思います。

現在わたしの手次寺院では、三〇人程



門徒会の横のつながりは薄いです。各寺院での集まりを持つ努力をしながら、それを基礎として現状を見直していくかなければいけない。こう感じています。

**高菜** 松本さんが参加されたという会は共学研修会といいます。教区内の若い僧侶だけではなく、近年は教区内の門徒さん、高岡教区の僧侶、お西の僧侶も参加されるようになりました。

A black and white portrait of Kōdai, an elderly man with dark hair, wearing a patterned jacket over a dark shirt. He is holding a microphone close to his mouth with both hands, looking slightly to the right of the camera with a serious expression.



が、話を出すのは  
門徒の方ばかりで  
すね。今回は、  
「門徒と寺とのつ  
ながりを考える」がテーマです。恥ず  
かしながら、うちの手次寺院も約三〇  
〇通の案内を出しますが、報恩講では  
約三〇名集まれば良い方です。こうい  
う現状を、皆さんのお寺ではどうされ

るといいと思います。総代を増やす、女性、若い人を増やすということを住職方に考えて欲しい。もう一つは、同朋の会に入った時に役員がいますが、自主的に入るのが建前ですが、自主的に入るのを待つのではなく、導くといふか、教導といふか、育成といふか、引つ張つていつて欲しい。

を各集落に置き、総代のようく運営させてもらっています。ただ言えるのは、その中に女性が一人もいないことです。例えば、各行事において五〇人集まるところ、女性は三〇人で男性が二〇人になる。したがって、総代にも女性を入れるようにしたら、ある程度、女性の参加数が増えるのではないかと思います。それと同時に若い世代、五〇代、六〇代という世代を総代に入れる形が増え

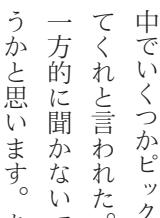
漱上　十二組の同朋の会を私のお寺で開催し始めて三年目になります。参加者が少なくて、会場を受けてくださるお寺も少なく、黒部の順番としてお受けしました。若い人に講師をお願いしたいといふリクエストがあり、現在は息子が講師をしております。参加者が増えた理由を私なりに考えれば、從来



が現実です。組の門徒会員も来年改選ですが、これも「出さない」とか「出しても参加しない」などいろいろあります。引き受け手がいない。受け入れ先が見えないという感じです。「こうあるべきだ、あるるべきだ」という前にも、現状に立たないといけない。現在は、「門徒会員は出して当然」という状況ではないと思います。

うと、報恩講チラシや来年のカレンダーなどを、地区毎にお願いしています。しかし市街の方は、お願いできなくてね。その市街の数百という門徒の分を、お寺でメール便にて発送する体制を整えているという現状です。手で配るのは不可能です。来月は寺院規則による総代任期が切れますが、「辞めさせてください」という人はいても、

「個程の質問を出してこられた。その中でいくつかピックアップしてしゃべつてくれと言われた。皆さんも、法話を一方的に聞かないでアピールしたらどうかと思います。あるお講では、こんな話もありました。「お講を続けていきたいが、お講って何か一つも分からん。お講について、歴史的背景を話してくれ」と言われたこともありました。聞きたいことは何かを言つてもらつた。



配布の際に、一件ずつ声をかけて回つてくれるから集まつてくださるのではないかと思います。法話については、皆さん文句ばかりで一方的です。質問が出ないとのことですが、黒部の荻生というところで老人会のお講（法話会）があります。この会に出席の野畑さんが、「どうせ話をするなら、私たちの聞きたいことを聞かせてくれ」と、一

の人にハガキを出して案内します。近所の人には、自分でプリントして自転車で配っています。顔を見てお伝えしています。だからたくさん的人が参加してくれるとと思う。結果として、顔を見て、声かけて、お誘いしないと人は集まらないと改めて思いました。黒都市三日市には郵送しますが、ほとんど来られません。お寺の近辺には、地図の方々に配布をお任せしています。

方が、こっちもしゃべりやすいということがあります。法話では、住職はそこの時々に伝えたいことをしゃべっていります。つまりだが、聞く方は聞きたくないことを聞いているのかもしれない。もうトリクエストして、アプローチする。それが一つのつながりになつたりするのではないかと思います。



藤田 各組では是非やつてもらえたらいいなと思います。うちの組で以前からしていることを紹介します。うちの組では組門徒会の研修を、組門徒会研修と本廟奉仕の二本立てで行っています。組門徒会員は、任期中に最低一回は上山しようと決めていて、任期が始まつた時に、「あなたは一年目、あなたは二年目に上山してください」と決めておきます。そして、正副組長の誰かが必ず引率する形を取つて六月に上山します。お寺方と門徒方が一緒に電車に乗り、奉仕団の日程を過ごす中で何かつながりというものができると思います。それともう一つ、八月に温泉で組門徒会一泊研修会があり、これには住職、寺族、参加できるものは全てに呼びかけています。やはり、共に宿泊し一緒に過ごすということが大事である

と思います。各組にご提案いたします。あとは十一組と十三組ですね。それと住職方と門徒方で温泉一泊しているのは九組もしていますよね。

平本 私は「お念佛の手渡し奉仕団」

に行つてきました。そこには関係学校の大学生も参加していて、学生とも話ををしてきました。その時、学生にも話を元に帰つたら同級生や友達をお寺に呼ばないのか」「友達と人生について話したことはあるのか」と質問しました。

そうしますと、「真宗の勉強をした自分が友達では話が合わない」と学生が言うんです。そのとき私は、「そうで

はなくて、若い人（友達）にも分かるように、真宗を勉強した若いものが、専門的な仏教用語を使わずに伝えていく術を研究しているのか」ということを思いました。若くて真宗を知らないものでも、分かるように教え伝えていけるようにならなければいけない。どうしてもギャップがある。僧侶は、もうと研究されたらどうですか。

北條 私の寺では、お互に本音で語り合いたいという思いから、門徒の方々と住職夫婦で温泉旅行を十二年前から続けております。今日のこの会もそうですが、やはり懇親の場を持つて深め

合い、本音を語り合えることは大変大事なことかと思っております。そんな私は、私自身が衣を着ているからといって上位であるという意識はまったくありません。寺を門徒と共に次の世代へバトンタッチしていくことが、一つの使命だと思っています。私が住職になつた当初、やはり門徒さんを見る目も、「こっちの方がお布施が多い」と

お金で判断している自分がいました。常にもらう側ですから、自分から出すという行為に慣れていません。あるとき近所のお通夜に寄せてもらつた時に、この地域では当たり前の御香儀を持っていかず恥ずかしい思いをした経験があります。そんな私が、今晚の懇親会でも教えていただきたいのですが、皆さんはどういう思いでお参りをしておられるのか？ ましてやお金を包んで行くわけですから、私にとつてはすごく大変なことだと思うのです。そしてまた、寺の報恩講などの記帳場（受付）の役員方も、一日を犠牲にして座つてくださる。二日目は人が増えないし、減る一方。収入もないし、参拝者もな

定で、これだけ来てくればよかつたという感覚でしか行事を捉えていない自分が恥ずかしく思います。その中で、お寺を護るために、住職に頼まれたためなのか、亡くなつてからお淨土にいきたいためなのか、どういうお心持ちでお金を包んでお参りしてくださるのかを、後の懇親会の席で教えていただきたいと思います。

高菜 北條さんにまとめていただきましてありがとうございます。私も初めての経験というか、どんな切り口でいこうかと昨日も駐在と悩んでおりました。前半はちょっと、ご意見も遠慮がちかなと思つておりましたが、後半は徐々にいろいろなご意見や思ひが出てきたところで時間がまいるました。引き続き懇親の場で、皆さまの口から出かかるたった思いを吐き出していた

だきたいと思います。

辻森 本日はお忙しい中、ご出席くださいましてありがとうございます。私も初めての経験というか、どんな切れども教えていただきたいのですが、皆さんはどういう思いでお参りをしておられるのか？ ましてやお金を包んで行くわけですから、私にとってはすごく大変なことだと思うのです。そしてまた、寺の報恩講などの記帳場（受付）の役員方も、一日を犠牲にして座つてくださる。二日目は人が増えないし、減る一方。収入もないし、参拝者もなし。そういう門徒方は、どういう思いでお金を包んで参拝しておられるのか？ 私は、僧職の身としてもっと恥じなければいけないのですが、ただただ金勘

## 活動紹介

# コール・菩提樹

早いもので、教区・別院主催の「蓮

如上人五百回御遠忌法要並びに宗祖親  
鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け法  
要」を機に再編成した富山教区混声合  
唱団は、もう四年目に入っています。

おかげさまで、恵まれた役員と熱心な  
メンバーに支えられて、ソプラノ十三  
名、アルト七名、テノール四名、バス  
五名といった編成で、原則として第一、  
第三金曜日の午後二時から三時半まで

を日処に練習を重ねています。

上述の御遠忌に音楽法要が行われた  
のがご縁で、信明院鍵役が御参修され  
る別院報恩講の一座に、音楽法要が取  
り入れられるようになって、少しずつ  
教区の皆様方にも知っていただくよう  
になりました。前身の「コール・リン  
デン」時代から毎年、富山別院御正忌  
や第十組お誕生会、仏前結婚式への参  
加と、合唱団活動としては、細々と約  
五十年余りの歳月を歩んできたことと  
なります。

教区の底力をいただいて、平成二十  
年四月十一日に新川文化ホールで行わ  
れた「仏教讃歌合唱『胡コンサート』」  
は、ステージ経験の乏しい私には忘れ  
られない貴重な経験でした。ステージ  
といえば、二〇一〇年四月京都・大谷  
婦人会館「アンサンブル・サンギーテ  
イ演奏会」への友情出演や同年九月高  
岡文化ホールで行われた高岡教区主催  
のお待ち受け大会に、助っ人として参  
加して、斬新的な刺激をいただきました。  
二〇一一年は、四月の「春の法要」

音楽法要に久しぶりで参拝しました。  
続いて五月の宗祖御遠忌音楽法要への  
準備をしていましたが、東日本大震災  
のために第一期法要が中止、「被災者  
支援のつどい」になり、自肃ムードに  
押され、音楽色を排除したのは遺憾で  
しました。ある関係者に、「そのための仏  
教讃歌でないのか、讃歌の力で被災者  
に寄り添い、悼み励ますのに相応しい



式次第を模索したらどうか」と進言し  
ましたが、聞き入れられませんでした。  
宗門の仏教讃歌に対する未熟さを痛  
感し、さらに仏教音楽による活動が趣  
味の域を超えて、新しい法要儀式が生  
まれていくことに繋がっていくことが  
求められます。

第十組 永福寺前住職 長闘寿

## 宗祖親鸞聖人七百五十回御正当報恩講

### 団体参拝に参加して

#### 参加者の声

第十三組 組門徒会長 木本隆信

の際にはその重厚さに圧倒されました  
が、今回はそれに加えて親しみも湧いて  
きたのが不思議でした。

宗祖親鸞聖人七百五十回御正当報恩講  
団体参拝に参加し、改めてご縁の尊さに接する機会に恵まれました。

十一月二十七日の午前六時、黒部インターでバスに乗り、正午前に東本願寺に到着、大修復で更なる威容を整えた御影堂を再び目の当たりにすることができました。四月の御遠忌法要参拝

六年までを対象とした稚児を含む参堂列が行わされました。よちよち歩きの子、親に抱かれて不機嫌な赤ちゃんなど様々で、場内は帰敬式時の緊張感とは異なり、和やかな雰囲気に包みました。

午後二時半からの結願述べ夜には雅楽も奏でられ、門徒感話、報恩講法話と続きました。

その後に勤行があり、正信偈が同朋奉讃で勤まりました。御遠忌法要では叶わなかつた新しい御影堂での御唱和に入れていただき、身の引き締まる思いで清々しい気分に浸りました。



その勤行が始まる直前に、私どもの席から少し離れた場所で、小さな男の子が突然「きみようむりようじゅによらい……」と称え出したのです。その声が大き過ぎたのか、隣に座っている祖父と思える人が手のひらでその子の口を抑えますが、誇示するかのように暗唱している正信偈を称え続けます。この光景は、今日では稀少になったお内仏を囲む家庭の姿が映し出されており、大変感慨深いものがありました。

二日目の二十八日は期待の「坂東曲」の日であり、朝七時半過ぎに宿舎を出て、御影堂では、お勤めの様子が肉眼で確認できる位置に席を求めることができました。

午前十時からの結願目中で、いよいよ「坂東曲」が始まりました。

御影堂の中はやや寒かったので、両手で膝を揉みながら、大震災の被災者に思いを馳せつつ我慢をしていましたところ、背後から合図がありました。それに振り向くと、御婦人が御影堂備え付けの膝かけ毛布を融通してくださいました。聞けば北海道教区の方で、先代が砺波地方の出身とのこと。タスキの富山教区を見て配慮くだされたものと思われ、ここでも繋がるご縁を感じた次第であります。

御影堂の中はやや寒かったので、両手で膝を揉みながら、大震災の被災者に思いを馳せつつ我慢をしていましたところ、背後から合図がありました。それに振り向くと、御婦人が御影堂備え付けの膝かけ毛布を融通してくださいました。聞けば北海道教区の方で、先代が砺波地方の出身とのこと。タスキの富山教区を見て配慮くだされたものと思われ、ここでも繋がるご縁を感じた次第であります。

明が頭と心を刺すように響く究極の体験でした。

御影堂の中はやや寒かったので、両手で膝を揉みながら、大震災の被災者に思いを馳せつつ我慢をしていましたところ、背後から合図がありました。それに振り向くと、御婦人が御影堂備え付けの膝かけ毛布を融通してくださいました。聞けば北海道教区の方で、先代が砺波地方の出身とのこと。タスキの富山教区を見て配慮くだされたものと思われ、ここでも繋がるご縁を感じた次第であります。

御影堂の中はやや寒かったので、両手で膝を揉みながら、大震災の被災者に思いを馳せつつ我慢をしていましたところ、背後から合図がありました。それに振り向くと、御婦人が御影堂備え付けの膝かけ毛布を融通してくださいました。聞けば北海道教区の方で、先代が砺波地方の出身とのこと。タスキの富山教区を見て配慮くだされたものと思われ、ここでも繋がるご縁を感じた次第であります。

## 参加者の声

## 第十一組 正樂寺門徒 岩城敏夫

これまで、本山をお参りすることは何度かありましたが、この度、宗祖親鸞聖人の七百五十回御正當報恩講を、家内と共に参拝することが出来て、こんなに幸せなことはありませんでした。

報恩講と聞くと、子供の頃が思い出されます。何日も前から祖父は仏具磨き、父や母はお華束づくりや掃除、ごちそう作りで天手古舞している姿が思い出されます。報恩講当日は、親戚、隣り近所の方々を招いて、お寺さんの

読経と法話の後、座敷にお膳が並べられ、酒も出て賑やかに「およばれ」が始まることを……。

私達は、十一月二十七日の午後、本山の御影堂に到着して御堂に案内されると、全国から大勢の方々が参拝されているのに感動しました。間もなく、

参堂列が始まりました。自分の孫よりもっと小さい子供の、着飾った可愛さに見惚れると共に、一時、心を和ませられました。この日の行事の中で、最も感銘を受けたのは、門徒感話をされた

藤田陸子さんの話でした。去る三月十一日の東北地方太平洋沖地震や、地震による大津波によって、一瞬にして何もかもが壊され、流され、命をも奪われた大自然の恐ろしさ、自然の力に対する人間の力の虚しさ、悔しさ、悲しみを体験された実感の一端を話されました。お話を聞いていて目頭が熱くなりました。私達は東北地方が復興するまで、決して忘れてはならないと思いました。翌二十八日は、初めて見聞きする坂東曲が勤まりました。大勢の僧侶が調声に統いて体を前後左右に振りながらのダイナミックさに感激しました。



今回の参拝で最も印象に残ったのは、

池田勇諦氏の、念仏の教えを顕かにされた宗祖親鸞聖人の「祖徳讃嘆」の法話でした。

二日間、丸々参拝の日程でしたが、大変中身の濃い大切な仏事に出会わせ

ていただきました。  
最後に、お世話をいたいた皆様、関係者の皆様、本当にありがとうございました。



御正当年にあたる2011年は、毎年11月の御正當報恩講を「宗祖親鸞聖人七百五十回御正當報恩講」と称し、11月21日の初速夜から28日の結願日中まで、七昼夜（8日間）にわたって厳修されました。

なお、被災され御遠忌法要に参拝できなかった方々をはじめ、御遠忌第一期法要中止にともない上山がかなわなかった方にも、宗祖親鸞聖人七百五十回御正當報恩講にお参りいただき、共に御遠忌の仏縁にお遇いいただく場となることが願われました。

## 就任のご挨拶



富山教務所長 辻森 正顯  
つじもり まさあき

教区の皆様には、お健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、平素より教区・別院の教化推進と教學研鑽に深いご理解とご協力をいただきとともに、法義相続・本廟護持にご尽力を賜っておりますこと、厚く御礼申し上げる次第です。

今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げご挨拶といたします。

## 着任のご挨拶

富山教務所主事 曰野 大修  
ひの だいしゅう



昨年九月一日付にて、富山教務所主事を拝命いたしました。

出身地は岐阜県（大垣教区）、前任地は大谷祖廟事務所であります。

## 退職のご挨拶

前富山教務所主事 三枝 正尚  
みえだ まさみさむ

本山からの辞令を受け、昨年八月三十一日付で、宗務役員を退職いたしました。

在職中、教区内の皆さまには、ご高齢者当初は、各組会、門徒会が過密スケジュールで開催され、あつという間に過ぎて行ったという感じです。その会では、毎回のようく教区の大事なテーマとして「門徒と寺とのつながりを考える」というフレーズを聞きました。今日まで数ヶ月、各教化事業、諸

会議などの経験や教区の皆様の声を聞かせていただく中で、徐々に私自身も大事なテーマであり、現状を踏まえた願いであると感じております。

現在、教区・別院宗祖御遠忌法要を計画する大事な時期であります。皆様と共に教区の実情を反映したよい歩みが出来ますよう尽くしていく所存でございます。

微力ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

このような得難い背景をいただいたことに慶びを感じるとともに、そのことが、今後高山で生きていく上で、大きな力になるものと確信をいたしております。

最後となりますが、富山教区・富山別院の宗祖御遠忌法要の期日が決定したこと。僭越ではありますが、富山教区と富山別院が「振起」の精神に促され、御遠忌法要の円成に向けて邁進されることを念願いたしております。

富山教務所では六年と一ヶ月、宗務役員としては二十二年と五ヶ月勤めさせていただき、これまでの半生を宗務役員として過ごさせていただきました。

この教区・別院としての御遠忌を基点として、改めて、地方の弘教の中心いと念願するものです。

別けても、昨年九月に厳修が決定された教区・別院宗祖親鸞聖人七百五十九回御遠忌法要は、教区挙げて、教区人一丸となつて取り組んでまいりました。この教区・別院としての御遠忌を基

退職して約五カ月がたつた今改めて

思いますのは、特に富山教区・富山別院にはお育てをいただいたなというこ

とであります。別院本堂の御修復と

二〇〇八年五月の御法要。その翌年に

開催された「教区同朋会議」とこれを

前後して大きな声となっていった「門

徒と寺とのつながりを考える」。宗祖

御遠忌法要と東日本大震災への若手の

活動。そしてこの『教報如大地』の発行。全てにおいて、業務として係わる

ということを超えて、私自身の血肉とな

るようなお育てであったと顧みること

であります。



教化日誌

(一〇一年七月一日至一〇一年十一月三十日)

- |           |                                   |                           |       |
|-----------|-----------------------------------|---------------------------|-------|
|           |                                   |                           | 教化日誌  |
| 4日        | 7月                                | (一〇一一年七月一日)～(一〇一一年十二月三十日) |       |
|           |                                   | 共学研修会                     |       |
|           |                                   | （吉澤夏樹・又愛・ツツ・ワ<br>第一回報告）   |       |
| 18日       | 17日                               | 10日                       | 9日    |
| 人生講座（第三回） | H.P.研究班合同委員会・インターネット<br>解放運動推進協議会 | 通常教区門徒会                   | 通常教区会 |

12日 富山別院声明作法講習会  
10日 第十一組組門徒会

編集後記

4日	会	共学研修会
4日	8日	災害復興支援ネットワーク第一回報告
11日	11日	企画委員会（第七回）
12日	12日	解放運動推進協議会
19日	19日	教区同朋の会総会
21日	人生講座（第二回）	【講師 井上 円氏】
21～22日	【講師 井上 円氏】	人生講座（第三回）
24日	東日本大震災を心に刻む集会 in 富山 （主催 災害復興支援ネットワーク）	富山別院 院議会
25日	22日	正副組門徒会長会
25日	23日	正副組長会
24～26日	24～26日	児童研修大会
25日	25日	第十三組組合会
27～28日	29日	御遠忌教区讃仰事業
30日	29日	大学生巡回（人形劇ほか）
30日	30日	北陸連区差別問題研修会
【講師 長田浩昭氏・鎌仲ひとみ氏】	コラボ	昆布ロード
【講師 長田浩昭氏・鎌仲ひとみ氏】	コラボ	【講師 長田浩昭氏・鎌仲ひとみ氏】

21 日	人生講座（第二回）	8 日	あいあう会
19 日	教区同朋の会総会	11 日	企画委員会（第七回）
	解放運動推進協議会	12 日	

27  
28  
29  
30  
日  
御遠忌教区講説事業 昆布ロード  
コンサート  
大学生巡回（人形劇ほか）  
北陸連区差別問題研修会

6月8日 富山別院報恩講  
20～21日 全國教務所主計會  
31日 共学研修会

		8月
27日	全国教区門徒会正副会長会	
29日	御遠忌委員会総会・教化委員会総会	
29(31)	富山別院曉天講座	
4日	戦死・戦災死者追慰法要（八・一法要）	
1日	教区改編委員会・割当審議委員会	
2日	共学研修会	
参事会・常任委員会合同会議		

9日	北陸連区坊守研修会 (大聖寺教区)	第一組組門徒会
8日	第九組組門徒会	第二組組門徒会
7日	第十一組組會	第三組組門徒会
7日	第九組組會	第四組組門徒会
6日	第十二組組門徒会	第五組組門徒会
5日	共學研修会	第六組組門徒会
5日	第十組組會	第七組組門徒会
2日	第十三組組門徒会	第八組組門徒会
1日	第十二組組會	第九組組門徒会

12月
27 ～ 28日
富山教区・別院御遠忌法要委員会法要参拝
部会
28日
富山別院「じ満さん」 体参拝
29日
富山教区・別院御遠忌法要委員会教化推進 部会
30日
富山教区・別院御遠忌法要委員会教化推進 部会

4日	2日	1日
参事会・常任委員会合同會議	共学研修会	戦死・戦災死者追慰法要（八・一法要）
		教区改編委員会・割当審議委員会
		1日
9日	8日	7日
北陸連区坊守研修会（大聖寺教区）	第九組組門徒会	第十一組組門徒会
		7日

また私達編集委員にもいろいろなことを教えて下さった。折に触れて「如大地」について熱く語られた。今、その言葉が思い起こされる。三枝さん、たいへんお世話になりました。今号はいかがでしょ  
うか。◆今号から、新しく教務所主事になられた日野大修さんが「如大地」事務方に就任され、新しい体制となつた。日野さん、これからよろしくお願ひします。◆「如大地」へのご意見・ご感想を